

# SSKW

# 海から海へ

No.28 2011.9.15

【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ  
〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5  
マートルコート調布407  
Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878  
<http://umi.or.jp> [office@umi.or.jp](mailto:office@umi.or.jp)



くじらといか Whales and Squids 910x1167 1997 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

## 画家のこのごろ

空にいわし雲が現れる季節が巡ってきました。夏の暑さが遠ざかろうとしている今、旅を通じ、さまざまな経験ができた時間を思い出します。

旅は非日常です。日常の生活から離れるということは、私たちが意識の世界から無意識の世界へ連れ出してくれます。似たようなことは、お酒を飲み楽しい気分になったり、スポーツをすることで心身ともに満たされた気持ちになったり、音楽やカラオケでも同様ですが、こころが解放された状態になるときです。(一方で無防備で、危ない状態でもあります…)

瑞木は旅が大好きと以前書きました。娘にとっても旅が、無意識の世界への誘いであることが分かります。旅に出たときの娘の表情は明るく、ニコニコとしていて、私たちも周りにいる他の人々も、その場にいることで、娘の幸せな時間の共有者になります。

娘の普段の生活は6時頃から始まります。朝食を摂り、片づけをし、身支度をし、癩癩の薬を服用し、出勤前の時間をいすにかけて待っています。8時20分、お弁当、仕事用の着替えや財布などでパンパンに膨らんだ大きなリュックを背負い、「いってきます」と言い、玄関へ向かいます。

玄関では、お互いの手のひらを合わせ、調子をつけて、「いってらっしゃい、気をつけて、いってらっしゃい」を呪文のように二人で言います。その後で、最近では「三上さんによろしくね、石川さんにもよろしくね、皆さんによろしくね、みんなにもよろしくね」と職場の方々を思い浮かべて、また二人の手を合わせ、言います。どんなに急いでいても、必ずそれをしないとドアを開けて出かけようとはしません。

私が先に家を出るときは、私が玄関にいる状態で、同じことをします。私が急いでいるときには、娘が「遅刻すると、校長先生に叱られる」と言いながら、私を見送ってくれます。だったら、その儀式はしなくても良いのではと考えると、私にとっては大事な時間と、思い直します。

さて、仕事場に着いた娘は掃除や洗濯物の係りとしてまじめに働きます。一度、見に行きました。同じ仕事をしているスタッフの方が「瑞木さんに教えられます。瑞木さんには波がないのです。休みの翌日は疲れているからと、サボるようなこともないし、一週間毎日、同じに仕事するのはすごいなあと。私なんか、甘いなあと。」と言いました。

確かに、娘は自分の仕事に責任を持っていると思います。自分に対する矜持もあると思います。だから、仕事に行くときに、スタッフの皆さんや利用者の皆さんが待っていると言葉にして、向かうのだと思います。

対人関係は良いことも悪いこともあり、ストレスの元凶

にもなりますが、自らがそこに愛情を見出し進むような強さが、朝の瑞木の言葉から受け取れると思います、私もその日会うはずの方々のお顔を思い浮かべます。仕事はそのように思うことで、ずいぶん変わると感じています。私も教えられています。

旅の話に戻りましょう。半年くらい前から、娘は旅に出る前に、ガイドブックを買うようになりました。家族で食卓を囲みながら、ディズニーランドの話をしていた頃が始まりだと記憶しています。

それから、しばらくして5月の連休にどこかへ出かけようと計画を立てることになりました。私事ですが、昨春、500キロメートルを1日で往復運転し、翌日から2日間、めまいで起きられませんでした。かかりつけの先生は脳が運転中の振動で疲れるということや目をずっと使うことの疲労の蓄積などが原因と話されました。そのとき決めたのは、せいぜい300キロメートルが私の運転できる一日の許容範囲ということ。結局、旅先は信州方面、1泊2日のドライブ旅行と決定。

ある日、夫と娘は書店に行き、ガイドブックを1冊選んだと帰宅した私に見せました。それから出かけるまで時間があると折に触れ、夫と娘はそれを広げていました。「みーちゃん、このお土産はSさんに、いいんじゃないかな?」「Sさんにいい!」「わさび漬なら、ここがよさそうだね」「ここがいい!」「お昼はお蕎麦にしよう」という私の提案にも「だったら、この辺にはいっぱいあるよ」「あるよ!」と、楽しい会話の時間が流れました。

食事を摂る店は「しょくじ」、お土産を買う店の情報は「おみやげ」などと、瑞木が書き込みます。娘を長く応援してください、スタジオマッスの河鍋さんからいただいたポストイット〔付箋紙〕を、ページにしっかり貼り付けた娘は満面笑みになります。行く前から、こんなに楽しそうにしている姿を見ているとこちらも幸せになります。

想像力を苦手とする娘に大きな刺激が加わり、頭の働きが活発になっているのでしょうか、驚きました。根気強く付き合う夫にも、驚きました。

それからは、毎週1回支援の方とコーヒーを飲みに出かけるたび、旅の本を買ってきます。いまやなんと、娘の部屋のライティングデスクの上には30冊を超えるガイドブックが並んでいます。『気軽に楽しむ自転車散歩』『東京散歩マップ』『大人の街歩き』『金沢』『信州ベストガイド』『富山』『散歩コース鎌倉』『温泉&やど』『静岡』『日帰り温泉&スーパー銭湯』『東京スカイツリー&浅草』『上野浅草』『吉祥寺ぴあ』『立川八王子国立国分寺ぴあ』『奈良』『北海道』…最近では『沖縄』。自転車の仕事で台湾に詳しい弟が案内してくれると約束したことから、今から、パイナップルケーキ、ウーロン茶、マンゴーなどのおみやげの話で盛り上がります。私はこういうときが来たことがうれしいです。

「みーちゃん、世界が広がって、いいね!」 (阿部愛子)



信州にて

## 成年後見、Mと学生たち

今年度は成年後見の研修を受けています。研修会講師からは、権利擁護、エンパワメントといった概念が強調されるものの、研修を受ける側の人たちから感じられるのは、困っている人のために、制度の枠の中でその人に何かをしてあげること、それを仕事にしようと考えているということです。それはそれで悪くはないのですが、そういう研修会は、なんとなく居心地が悪いです。人にはいろいろな事情があって、事情はそれぞれまったく違います。その人にとって何が役に立つかなどということは、そう簡単に分かりません。後見人は被後見人を導くのではなく、被後見人のそばにいて被後見人から学ぶということだと思います。また、個々の事情に合わせ、制度をどう変えていったらよいか、代弁し、提言することも、後見人の大事な仕事だと思います。

人が違えば、まったく新しいことが起こります。また同じ人でも、いつも同じとは限りません。どんなときも、相手から学ぶことはとても大事です。このことを日常的に感じます。

わが家の娘Mは、「泣いてる」ということばを通して困っていることを表現します。誰が？自分じゃなく、私が、妻が。たとえば、ビールがなくて、泣いてる。パンがなくて、泣いてる。豆乳がなくて、泣いてる。牛乳がなくて、泣いてる。「泣いてるよー」「そう、泣いてるよ」、と私たち。Mは、「書いとう」と言って、ポストイットに書いてカレンダーに貼ります。作ってくれたパンや買ってきてくれた物を見せて、「泣いてた？」とM。「泣いてたよ。ありがとう」、と私たち。

「困っている人がいれば私が解決してあげる。欲しいものがあれば私がもってきてあげる。誰かがうれしいと私もうれしい」。一方で、「お掃除、食事の片付け、ちゃんと

やらないとダメ。電車の中や公共の場で大声を出すのはご迷惑。電話でお話ししている人がいれば、近くの方は静かにしましょう」。直截な表現に、「うん、そうだね」、と私たちは素直にならずきまず。

職場では授業や少人数のゼミで大学生の相手をします。しかし、最近は個別のゼミの機会が多いように思います。

A君は、就職活動がうまくいかず、留年しました。対話がうまく進みません。ことばがなかなか見出せないというA君を前に、私がしゃべります。「こんなことがあったんだよね。このあいだ内輪で父母の法要をしたんだ。お坊さんは呼ばないことにしたのね。だけど、お経は良いんじゃないかと思ってさ。誰が唱えたっていい、それじゃ僕がやろう。袈裟も貸衣装で、と思ったけどそれはやめた。般若心経を覚えてさ。りんを妻に鳴らしてもらって。でもね。あがってしまって、りんを2つ鳴らして始めるところを1つで出てしまい、お経も一節飛ばしてしまった。でもみなさんは優しくってさ。そんな変な法事でも楽しかったって」。A君は、おもしろがって笑ってくれます。ことばは少なくとも表情から心の動きが分かります。

A君は約束どおり、毎週決めた時間に私のところにやってきます。最近大学院に合格し、おもしろいテーマを見つけたと言って、メモを書いて私に見せ、説明してくれます。

単位不足で除籍になりそうな在学8年目のB君は、ゼミではとても鋭い発言をします。しかし、授業の単位が不足しています。単位がとれないのは授業にちゃんと出ないから、また試験を受けても成績が悪いから。多くの教員は、子どもじゃないんだから、と無関心。ご両親は、この子は卒業できないんじゃないかと思い、この先、社会の中でどうやって生きていくんだろう、と悲観していました。

B君が授業に出ないのは、別のことをしているからでした。ゲーム制作に励んでいて、授業に出ない。できなかったという試験問題を私と一緒に解いてみると、次の日になって、すばらしい解法を私に教えてくれます。時間をかけるとできる。試験ができないのは、解答に時間がかかるから。時間を使って対話をすれば、B君に力のあることはすぐ分かります。

B君のアイデアはすばらしく、実行力もあります。卒業後、研究の成果を学会で発表しました。現在は、大学院の受験勉強の傍ら、子どもも楽しめるようなカードゲームの制作に勤しんでいるとのこと。

相手を導くのではなく、相手に導いてもらう。そのために、境界を取り除く。私ってこんな人間です、今、こんなことをやっています、おかしいよね、というのが一つ。あなたの話し、面白いですね、でもよく分からないところがあって、僕はこう思うんだが、どう思う？教えてくれない？というのがもう一つ。こういうふうにしてみると、お互いに楽しいと思うのですが、どんなものでしょうか。いつもうまく行くとはいりません。（阿部公輝）

平成22年度会計報告 (単位:円)

I 経常収入の部	
1. 会費収入	145,000
2. 寄付金収入	327,650
3. 受取利息	195
経常収入合計	472,845
II 経常支出の部	
1. 事業費	
(1)障がいをもつ人を中心とした芸術活動の支援と作品の公開展示	0
(2)障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究と実践	6,000
(3)障がいをもつ人を中心とした交流の促進	41,000
(4)芸術、教育、心理、福祉などに関する社会教育	0
(5)障がいをもつ人とその関係者のための個別相談、教育支援、生活支援	0
(6)活動に関する広報および成果の公表	208,638
(7)(1)～(6)の事業活動のための募金	0
2. 管理費	121,277
経常支出合計	376,915
経常収支	95,930
前期繰越	903,452
次期繰越	999,382

展覧会開催予定

今年7月末、静岡市清水区にある「えじり保育園」におじゃましました。写真のように、入口のホール中央に美しく磨かれた枝ぶりの良い太い木が立っています。天竜川から運んできたヒノキとのこと。

園長の井出みや子さんとお連れ合いの雅士さんとは、2009年夏の長野県南牧村美術館での田中瑞木美術館展でお会いしました。井出さんご夫妻は、夏の八ヶ岳での休暇で、偶然南牧村の美術館に立ち寄られ、田中瑞木の絵に感動されたとのこと。「新しく建設した保育園は壁に絵を展示できる設計になっています。瑞木さんの絵の展覧会ではできませんか」と話されました。

それから2年、えじり保育園での展覧会が具体化しつつあります。静岡の子どもやお母さんお父さん、地域の方々に田中瑞木の絵を観ていただき、交流ができればと考えています。

来年2月の開催予定です。お楽しみに。詳細は次号でお知らせします。



えじり保育園のヒノキ

編集後記

秋の作品がまもなく展示されます。地元の理事の粕谷富久代さんと山口ひろみさんと一緒に夏の絵を外します。

秋の絵の人気ナンバー1は、「秋のサファリパーク」でしょうか。50号の絵は迫力満点。1頭のキリンが草原に立ち、こちらを見えています。辺りは秋の木々・・・。

私はこの絵について拙著「みずきのびじゅつかん」\*で、「キリンはじっと待っています。人はいつか愛する人に巡り会おうと信じ、ひっそりとした孤独の時間を生きている」という意味のことを記しました。

田中瑞木美術館では、人と人が巡り会い、新たなページを開けられるようなお手伝いや応援ができると思います。新しい絵を観に、皆様どうぞお出かけ下さい。お待ちしております。(愛)

\*汐文社2008年出版

特定非営利活動法人 海から海へ  
http://umi.or.jp office@umi.or.jp

2011年9月15日 海から海へ No.28

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5

マートルコート調布407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価200円

無断転載禁止